



えちえちチャームデュエルカード

第1巻体験版

えっちなデュエルに敗北するデュエリスト

ゆうたん

目次

カードゲームのキャラクターに魅了されて精を絞られてしまうデュエル調査官.....	2
おっぱい誘惑に負けて自ら敗北を選んでしまうデュエリスト.....	17

カードゲームのキャラクターに魅了されて
精を絞られてしまうデュエル調査官

チャームデュエルカード。

かつて淫魔^{いんま}と戦うために作られたカードである。人間達は
チャームデュエルカードにより強力なモンスター・兵器・魔法^{しゅいかん}を召喚し、淫魔に戦いを挑んだ^{いど}。一方、淫魔達も人間達の
技術を盗み、独自のチャームデュエルカードを生成して対抗^{たいこう}した。

長い戦いの末、人間と淫魔達は和解。人間達と淫魔達が作ったチャームデュエルカードは、安全な形に改良されゲームとして楽しまれることになった。

チャームデュエルカードは少々過激^{かげき}なイラストのカードは

あるものの、基本的には子供でも遊べる健全で安全なゲームである。現在生産されているカードは立体映像を投影^{とうえい}する機能はあるものの、モンスターや魔法などを召喚する機能はな
いだけのカードだ。

しかし、最近とある闇カジノで違法な裏デュエルが行われているらしい。そのデュエルでは違法に製造したカードを使用しているようだ。そしてそのカードは戦争時代の技術が利用されているとの情報もある。

戦争時代に作られたという話が本当としたら実際にモンスターや魔法・兵器を召喚できる危険なものということだ。そんなものが出回ったらまた争いの火種になるかもしれない。なんとしても被害者が出る前に実態を調べなければ。

デュエル調査官である僕は早速闇カジノに潜入^{せんにゅう}を試みる。裏デュエルが行われているのはカジノの奥のようだ。

僕は奥の部屋の扉^{しりぞ}の部屋に手をかける。中では一体どんな危険なデュエルが行われているのだろうか。僕は息を飲みながら扉を開く。

「さて、挑戦者はここでターンエンド！次はクイーンのターンです！」

実況の女性の声と共に会場に歓声^{かんせい}が上がった。中央にはデュエルフィールドがあり、それを取り囲むように観客^{かんきやく}達が立っている。どうやら男性客よりも女性客の方が多いようだ。女性に人気なデュエルとは一体…。

僕はデュエルフィールドを見る。そして目を疑^{うたが}った。

デュエルを行っているのは一方は二十代前半くらいの女性。胸の大きく開いたちよつと、というかなり過激なドレスを着ているセクシーな女性だ。そして頭には二本の角、背中にはコウモリのような翼^{つばさ}がある。淫魔だ。恐らく「クイーン」というのは彼女のことだろう。

もう一人は男性。なのだが、なぜか全裸でデュエルをしている。ペニスはガチガチに勃起している。

クイーンは手札からカードを一枚手にする。そしてそれを公開した。

「スペルカード、『投げキッス』を発動。誘惑モンスターが場

にいる時、相手プレイヤーを魅了状態にする」

あんなカードはチャームデュエルカードにはないはず。やはり違法に生成されたカードが使用されているのか。

カードの効果が発動し、場に出ていた淫魔達が投げキッスをする。ハートマークが挑戦者の元へ飛んでいき、破裂^{はれつ}した。

「ふわああ…」

挑戦者はすっかり幻惑に魅了されてしまった様子。やはりただのカードではなく現実の効果として発動しているようだ。

「さらにスペルカード、『ハーレムテンプレーション』を発動！相手は魅惑の幻惑に包まれ、毎ターンダメージを受ける！」

あれもチャームデュエルカードにはないはずのカード。一体どれだけのカードが違法に生成されているのだろうか。

『ハーレムテンプレーション』のカードからピンク色のハートが吹き出す。そして挑戦者の体を包んだ。そして三人の

淫魔が現れ、挑戦者の体に密着して愛撫を始めた。

「す、すごい、気持ちいい！」

挑戦者はカードの生み出した淫魔達の快楽に身悶えしている。ただの幻想ではなく快楽まで与えているようだ。

「クイーンはモンスターで総攻撃をかけてターンエンド。次は挑戦者のターン、残り少ないライフでどうするのでしょうか？」

男性はうっとりした顔のままカードを引く。そして…

「ふふふ、無駄ですよ。魅了状態のプレイヤーは攻撃、召喚、効果の発動が全て行えません。よって何もせずにターンを終えるしかありません」

クイーンは勝ち誇った顔で挑戦者を見下ろす。

「おおっとそうでしたあ！凶悪な状態異常、魅了状態にされてしまったプレイヤーは何もできません！」

「た、ターンエンド」

挑戦者は彼女の言う通り何もできなかった様子。そのままターンを終えてしまう。

「さて、ターン終了と共に魅了状態は終了しますが、挑戦者のフィールドはがら空き！残り体力は僅かです。あとは敗北を待つのみとなってしまいました！」

「私のターン」

クイーンはカードを引く。そしてにやっと笑った。

「今のままモンスターで総攻撃をかければ勝利できますけど、せっかく挑戦して頂いたんですからサービスしないといけませんね。このカードでトドメをさしてあげます♥」

彼女は一枚のカードを場に出す。

『『サキユバスクイーン』を召喚』

彼女が召喚したカードがセクシーなボンテージを纏うサキユバスが現れる。

「出ましたー！クイーンのエースモンスターにして彼女のバトルネームの由来でもある『サキユバスクイーン』！」

興奮した様子で実況が叫んだ。さらに観客も一気に湧き上がる。

「本来召喚したターン、モンスターは攻撃できませんが、場

の『サキュバスビショップ』の効果発動！」

場にいたサキュバスビショップの杖が輝き出す。その輝きは大きく光り、『サキュバスクイーン』の体を包み込む。

「誘惑モンスターが召喚された時、そのモンスターに速攻を与え、自身をターン終了時まで攻撃不能にする。これで『サキュバスクイーン』は攻撃可能となります。さあ、行きなさい、『サキュバスクイーン』！プレイヤーに直接攻撃！」

クイーンは右手を前に突き出してモンスターに指示を出す。

『サキュバスクイーン』は挑戦者を抱きしめる。そして右手で彼のペニスをしごき始めた。

「ああ…♥」

挑戦者は恍惚とした顔で快楽に浸る。

「で、出るう♥」

そしてライフがゼロになると同時に射精してしまった。

「決まりました！勝者はクイーン。残念ながら挑戦者は敗

北！」

勝負は決したようだ。しかし、会場はまだざわざわしている。何かを待ち侘びている様子だ。

それに本来ならデュエルが終了した場合、すぐにモンスターは消えるはず。しかし、『サキュバスクイーン』はまだ場に残り、挑戦者を抱き抱えたままだ。

「では、挑戦者が敗北したということで、罰ゲーム開始です！」

実況がそう宣言した瞬間、再び会場が湧き上がった。『サキュバスクイーン』は大きなおっぱいで挑戦者のペニスを挟み込む。そしてゆっくりとしごき始めた。

「敗北した挑戦者は精液をたっぷり絞られてしまっています。人によつては罰ゲームじゃなくてご褒美かもしれませんね。これをやってもらうためにわざと負けてしまう挑戦者も多いとか。今回の挑戦者はどうなのでしょうか？」

挑戦者は無抵抗のまま『サキュバスクイーン』の与える快楽を味わっている。ペニスが再び大きくなり体が震え始める。

どびゅっ。

挑戦者はまた射精をする。『サキユバスクイーン』のおっぱいにどくどくと精液が流れ出る。

「挑戦者はまた射精してしまいました。しかし、これで終わりではありませんよ！罰ゲームはまだまだ続きます！」

観客はさらに盛り上がる。会場全体が異様な熱気に包まれていた。

その後も『サキユバスクイーン』の容赦ない責めは続く。
結局挑戦者が気絶するまで続けられた。

「本日の一戦目は終了。これより二戦目を開始します。さあ、どなたでも参加は自由ですよ！我こそはという方は今すぐ……」

「ちょっといいですか？マイクを……」

実況が次の試合の募集をかけようとしたところでクイーンが制止する。

「おや、どうやらクイーンから何か話があるようですね。では、どうぞ……」

クイーンは実況からマイクを受け取る。

「次の挑戦者は私が指名していいですか？」

「おおっと！ここで当然のサブライズ！クイーン自ら挑戦者を指名することです！もちろん○×です！」

実況はどこからともなく二本目のマイクを取り出して叫ぶ。クイーンの提案に会場は大きく歓声をあげた。

「ありがとう」

クイーンをにっこりと笑う。

「さあ、クイーンに試合を申し込まれるラッキボーイ、あるいはラッキーガールは誰なのかあ！」

「私の相手はあなたです」

彼女の指差した先にいたのは……え？僕？

「クイーンが指名したラッキボーイはドアのすぐ側にいた好青年。さあ、早速デュエルフィールドに上がってください

い」

(くっ。下手に逃げると怪しまれる。上がるしかないか)

僕はデュエルフィールドに向かう。観客は拍手をしながら僕を^た読^よみ取^とってくれた。クイーンは僕を見て含^ふみのある笑みを浮かべている。どうやら僕がデュエル調査官であることを見破っている様子。やはり戦うしかないか。

一応デッキは用意してある。サキユバスのカード生成技術が使われている可能性も考え、誘惑耐性のあるカードを用意してきた。相手の実力は相当なものだと思うが、僕も調査官になるために訓練を重ねてきた。負ける訳には行かない。

「では、挑戦者さん一言どうぞ」

実況は僕にマイクを向ける。こういうのは苦手だ。

「が、がんばります」

自信のなさそうな回答になってしまった。観客達からくすくすという笑い声が聞こえる。

「あはは、緊張^{きんちよう}してみたいですね。では、クイーンも一言どうぞ」

「あなたもメロメロにしてあげます♥」

自信たっぷりに答えるクイーン。会場も大きく盛り上がった。

「それでは、デュエル開始の前に、挑戦者さんは服を全部脱いでください」

「え？」

突然^{とつぜん}の実況の言葉に僕は絶句する。そういえばさっきの男も全裸で戦っていた。

「規則ですの」

「わ、わかったよ」

僕は服を脱ぎ捨てる。

「パンツも脱いでくださいね」

と、実況。

「わ、わかってるよ」

僕はパンツを脱ぎ捨てる。

(というかクイーンは服を着ているじゃないか)

そのツツコミを僕はぐつとこらえる。

いや、今は目の前の戦いに集中すべきだ。この屈辱^{くつじやく}は絶対

に倍にして返す。

「では、改めて、デュエル開始！挑戦者さん頑張ってください！」

「先攻はどうぞ」

クイーンは余裕たっぷりに言った。チャームデュエルカードは先攻が有利なゲーム。チャンピオンの余裕という訳か。

【第一ターン デュエル調査官】

先攻はカードをドローできず手札三枚から始まる。

（最初の手札は…よし、悪くない手札だ）

最初のターンにプレイヤーが使える合計コストは「1」。よってコスト「1」かコスト「0」のカードしか出せない。

「僕はコスト「1」の『クイックナイト』を召喚。ターンエンド」

ひとまずコスト「1」のカードを出しておく。『クイックナイト』は攻撃力、体力共に「1」のカード。攻撃されればすぐに破

壊されてしまうカードではあるが…。

『クイックナイト』は手札から召喚した時速攻能力を得る。相手プレイヤーにダイレクトアタック！」

本来召喚したターン、モンスターは攻撃できない。しかし、速攻能力のある『クイックナイト』なら可能だ。

「僕はこれでターンエンド」

ひとまず先制攻撃は決められた。

（さあ、相手はどう出るか？）

【第一ターン クイーン】

「私のターン、ドロー」

クイーンはカードを引く。後攻は最初のターンからカードを引くことが可能だ。

『インプ』を召喚」

クイーンのフィールドに可愛らしい女の子の悪魔あくまのモンスター『インプ』が召喚された。『インプ』は僕に向かってウイ

ンクする。相手が出したモンスターも攻撃力1、体力1のコスト1モンスターだ。

「これでターンエンド」

クイーンはモンスターを出しただけで終わった。しかし、まだ1ターン目が終わっただけだ。勝負はここから。

【第2ターン デュエル調査官】

2ターン目はプレイヤーが使えるコストが1増えて使えるコストは合計2。

「僕のターン、ドロロー。僕はコスト2のホワイトナイトを召喚。そして『クイックナイト』で『インプ』を攻撃！」

『インプ』の体力は1。『クイックナイト』の攻撃でも倒せる。

「『インプ』撃破！」

しかし、バトルを仕掛けた場合攻撃した側も相手の攻撃力分の反撃を受ける。『インプ』も攻撃力は1。『クイックナイ

ト』の体力も1。『クイックナイト』も体力が尽きて破壊された。

「『インプ』の破壊時効果、デッキから誘惑モンスター1体を手札に加える」

手札増強効果か。迂闊に破壊したのは失敗だったかもしれない。

「ターンエンド」

僕はそのままターンを終える。

【第3ターン クイーン】

「私のターン、ドロロー。私は『レッサーサキュバス』を召喚」

クイーンが次に呼び出したのはこれまた可愛い淫魔のモンスター。攻撃力は1。体力は2だ。

「『レッサーサキュバス』の召喚時効果、手札のカードのコストをひとつ下げる。私はコスト1の『フェロモンコール』の

コストを下げる」

コストを下げるカードか。攻撃力は低いがなかなか厄介なカードだ。やつめい

「コストゼロとなったフェロモンコールを発動。手札のモンスターのコストをひとつ下げて召喚。さらにカードを一枚ドロ」

(くっ、またコストを下げるカード。しかも手札増強効果まで)

高速展開デッキか。下手に倒せば効果のトリガーにされてしまう。慎重に立ち回る必要があるだろう。しんちょう

「僕のターン！」

その後は一進一退の攻防が続く。相手の展開したモンスターは確実に倒しているが、相手はすぐさま次のモンスターを展開しつつ手札を増強。僕もモンスターを展開し、対応しているが、彼女の展開力を捌ききれずにいた。

そしてのターン目。

僕のフィールドには攻撃力ω、体力ωの『ブラックナイ

ト』。相手フィールドにはインプが一体のみ。残りライフは僕が20で相手は15。体力及び盤面ばんめんの差を見ると有利に見えるが、どんどん手札を消費してしまっている僕に対して、相手はまだ潤沢じゅんたくに手札がある。

「ここまでは挑戦者がやや優勢ゆうせいか。しかし、クイーンは余裕よゆうの表情。まだまだ勝負はわからなそうですね。さあ、注目のクイーンのターンです！」

【第9ターン クイーン】

「私のターン、ドロ。私は設置スベル、『誘惑のフェロモン』を発動。このカードが設置されている限り、誘惑耐性のないモンスターの攻撃力は場の誘惑モンスターの数だけダウン」

クイーンが発動したのは全体デバフカード。誘惑耐性がなければ弱体化されてしまう凶悪きょうあくなカードだ。

「さらに『アローサキュバス』を召喚。召喚時効果により

『ブラックナイト』にダメージ

「しまった！」

「さらにインプで攻撃。ブラックナイトと相打ちです。ですが、インプの破壊時能力により、誘惑モンスターを手札に加えられます」

ついにこちらのモンスターを突破とっばされてしまった。しかも相手はまた手札補充。このままでは手札の差で確実に押し切られる。

『『フェロモンコール』を発動。手札のコスト』のインプをコストゼロにして召喚。さらにカードを一枚ドロ。ターンエンド」

【第４ターン デュエル調査官】

「クイーンの攻撃により、挑戦者のフィールドは壊滅かいめつ。しかも設置スベルの効果で誘惑モンスターの数だけパワーダウンしてしまいます。挑戦者に打開策はあるのか！」

このターンで打開だかいできるカードを引けなければ逆転が難しい。僕は願いをこめてカードを引く。

「僕のターン、ドロロー！よし！」

僕が引いたのは『ガードナイトレディ』。誘惑耐性を持つモンスターだ。しかもプレイヤーへの直接攻撃及びプレイヤーを対象にする効果を無効にする効果持ち。つまり先ほどのデュエルで使われた投げキッスも無効にできる。

攻撃力は心と低いが体力はある。そして誘惑耐性により誘惑モンスターから受けるダメージを軽減けいげん可能。逆転の一手とまではいかないがひとまず次のターンは凌しのげるだろう。その間に打開策を見つける。

「僕は『ガードナイトレディ』を召喚。これでターンエンド」

「おやおや。それで終わりでいいんですか？あなたには少々期待していたのですが、買い被かぶりしすぎていたようですね」
誘惑耐性のあるモンスターを見ても余裕の表情を崩くずさないクイーン。実際彼女がまだ優勢ゆうせいであることに変わりはない。

【第1ターン クイーン】

「私のターン、ドロロー。さて、可愛いナイトちゃんには黙だまっていてもいいでしょうかね。スペルカード、『スキルクラッシュ』。相手のランダムなモンスター一体の効果を永続的に無効にします」

「何!？」

「私が誘惑耐性の対策をしていないと思いましたが? 効果対象はランダムですがあなたのフィールドには『ガードナイトレディ』しかいません。よって『ガードナイトレディ』の効果は無効にします」

「くっ」

『ガードナイトレディ』の効果が失われたことで誘惑耐性がなくなってしまう。これではダメージを軽減できず、プレイヤーへの効果も防ぐことができない。しかし、それだけではない。『誘惑のフェロモン』の効果により、『ガードナイトレディ』も攻撃力がダウンしてしまう。

相手の場には誘惑モンスターが二体。よって攻撃力は0になってしまう。

「続いて『フェロモンサキュバス』を召喚。その効果によりこのカードが存在する限り相手プレイヤーをオナニー状態にします」

「お、オナニー状態!？」

不意に僕の手が勝手に動き出す。そしてペニスつかを掴んでしまう。そのままオナニーを始めた。

「オナニー状態になったプレイヤーは毎ターン終了時にダメージを受けてしまいます。あ、ちなみにデュエル中に絶頂ぜっとうしてしまつたら残りライフに関わらず負けになってしまいますから気をつけて」

「な、なんだって、くっ、止まれ!」

止めようと腕うでに力を入れるが全く言うことをきかない。勝手に動き、オナニーを続けてしまう。

「ふふふ、ダメージを受けるのはターン終了時ですが、オナニーは常にか続きます。早くしないとライフがゼロになる前に

射精しちゃうかもしれませんね」

くすくすと笑うクイーン。

「くっ」

しかも右手でオナニーをしているせいで左手だけでデュエルを続けなければならない。かなり戦いにくい。

「さて、次はどうしますかねー」

わざとらしく長考を始めるクイーン。彼女は既にこのターンのコストを使い切っている。できることと言えば攻撃をす
るくらいだ。

「一応ライフを削^{けず}っておきましょうか」

クイーンは攻撃能力も防御能力も失った『ガードナイトレディ』を無視して僕に直接攻撃。僕のライフを削りにかかる。

「私はこれでターンエンド。そしてオナニー状態によるスリッパダメージを受けてもらいます」

「くっ」

まだライフに余裕はあるが、オナニー状態が厄介^{やっかい}だ。次の

ドローにかけるしかない。

【第∞ターン デュエル調査官】

「僕のターン、ドロー。来た！スペル、『サンダープラスター』。フィールドの攻撃力 ∞ 以下のモンスターを全て破壊する」

相手のモンスターは全て低攻撃力モンスター。『ガードナイトレディ』は破壊されてしまうが、これで場をリセットできる。そして『フェロモンサキュバス』が消えたことでオナニー状態も解除^{かいじょ}だ。

「おotto。見事な一手だ！かなりピンチの状況の挑戦者でしたが、逆転のカードでフィールドをリセットしましたあ！」

「あらら、やりますね。『誘惑のフェロモン』の効果、誘惑モンスターが場にいなかった時破壊されます」

「よし」

これで相手の場にカードはなくなった。サンダーブラスターは高コストのカードであるため、このターン僕は何もできないが、これで少しは希望が見えてきた。

『『フェロモンサキュバス』の破壊時効果、手札のカードを一枚選択してコストをい下げます。私がコストを下げるのはこのカード』

「そのカードは…」

クイーンが見せたのは彼女のエースモンスターである『サキュバスクイーン』。そのコストは20。強力なカードだが、このゲームの最大コストは10。コストを5下げたところで15だ。そのままでは召喚できないが…。

【第∞ターン クイーン】

「私のターン、ドロー。『サキュバスクイーン』はこのデュエル中に召喚した誘惑モンスターの数だけコストを下げる事ができます。私がこのデュエル中に召喚した誘惑モンスター

は一〇体。よってコスト10で召喚できちゃいます」

「何!？」

『サキュバスクイーン』が場呼び出される。

「『サキュバスクイーン』の効果、相手を永久魅了状態にします」

「永久魅了状態だど!？」

魅了状態はいかなるプレイヤーの行動を封じてしまう。それが永久と言うことは…。

「ふふ。お察しきつの通り。これであなたは何もできません。あなたの負けです♥」

『サキュバスクイーン』が艶かしいポーズで僕を誘惑する。僕はその姿に魅了きようれつされてしまう。

「出ました!サキュバスクイーンの凶悪効果。こうなったらライフがいくら残っていても敗北確定。挑戦者は敗北の時を待つしかありません」

実況の内容とは裏腹に僕の敗北を待ち侘びている様子だ。それは観客も同様で僕の敗北を今か今かと待っている様子。

「さあ、あなたにターンを回してあげますよ」

僕のターンが回ってくる。しかし僕ができることはカードを一枚引くことだけ。何もせずにターンを終えるしかない。

『サキュバスクイーン』で直接攻撃です」

『サキュバスクイーン』の攻撃力は10。強烈なダメージに僕は襲^{おそ}われる。僕のライフは残り0になった。だが、いくらこの攻撃を耐えても何の意味もない。

「ターンエンド」

クイーンは『サキュバスクイーン』で攻撃しただけでターンを終える。また無意味にターンが回ってきた。僕はカードを一枚引いただけでターンを終える。

「さあ、終わりの時間です。『サキュバスクイーン』で攻撃」

『サキュバスクイーン』が僕に迫ってくる。僕のペニスをおっぱいで挟^{はさ}み、激しくしごいた。

「あ、あう…出る…」

どぴゅっ。

パイズリによる強烈^{きょうれつ}な快感に耐えられず僕は射精してしまつた。サキュバスクイーンのおっぱいを精液で汚してしまふ。

「ふふふ。思ったより楽しめましたね」

「さあ、敗北してしまつた挑戦者には恐怖の罰ゲームが待っています」

「楽しませてくれたお礼にいっぱい遊んであげますね」

クイーンは次々にモンスターを召喚する。『インプ』、『レッサーサキュバス』、『フェロモンサキュバス』。

『フェロモンサキュバス』の効果。相手をオナニー状態にします」

「うう…」

また手が勝手に動き出してしまふ。いったばかりのペニスを自らしごき始める。

「次は、『インプ』ちゃんと『レッサーサキュバス』ちゃんでの攻撃」

『インプ』と『レッサーサキュバス』は左右から僕に密着みつちやくする。そして僕の耳を舐め始めた。僕の耳の中が舌によってグッポリと犯されていく。

(気持ちいい…)

耳舐めによって僕の理性が溶かされていく。ペニスをしごくスピードが上がってしまう。

『「サキュバスクイーン」で攻撃』

『サキュバスクイーン』は僕の顔を大きなおっぱいで挟み、ばふばふする。僕はすぐに柔らかいおっぱいの虜になってしまう。

「挑戦者は誘惑モンスター達に取り囲まれてしまいました。耳舐めにばふばふ、さらに強制オナニー、なんとという素晴らしい褒美ほうび、いえ、なんとという恐ろしいコンボなのでしょう
か」

誘惑モンスター達の連携攻撃にすっかりと魅了された僕はペニスを激しくしごき続ける。最早カードに操られているのか、自分の意志でしごいているのかもわからない。しかし、

強烈な快感の前に手を止める選択肢はなかった。

「さあ、情けなく出してしまいなさい♥」

どびゅつ。

僕は自らのペニスをしごきあげ、射精してしまった。大量の精液が僕のペニスから吐き出される。それと同時にモンスター達は姿を消した。僕は力なく倒れる。だらしなく床に倒れ伏せ、快感の余韻に浸った。

僕が倒れると共に会場に歓声上がる。

「さて、あなたには聞きたいことがあるんですが…ふふふ、その様子だと少し休憩きゅうけいが必要ですね」

クイーンが僕に近寄ってくる。

会場の歓声を聞きながら、僕の意識は薄れていった。

おっぱい誘惑に負けて自ら敗北を

選んでしまうデュエリスト

チャームデュエルカードは新たな時代を迎える。

えちえちデュエル。

それはえつちなカードを使って戦う特殊なデュエルである。
る。

元々闇カジノによって行われていたグレーなデュエルであ
つたが、もちろん諸々の問題を解決しつつに正規のデュエルのルール
として認められた。

今日も各地でえちえちなデュエルが行われている。

「これで終わりだ。相手プレイヤーにダイレクトアタック！」

「うわああああ！」

僕のモンスター『炎の魔導騎士』の直接攻撃が決まった。

相手のライフがゼロになる。

「僕の勝ちだ」

今のデュエルの勝利で五連勝。この大会の予選では五勝すれば決勝トーナメントに進むことができる。よって決勝トーナメント進出決定だ。

なのにあまり喜べない自分がいる。この大会、レベルが低すぎるのだ。ここまで無敗で勝ち進んできたが、いずれの試合も相手が弱すぎてまともな勝負にならなかった。

この大会はえちえちデュエルなるルールが適用された大会で、えちえちカードという特殊なカードの使用が許可されている。

そのせいかえつちな攻撃を受けるただけに大会に参加しているドMや、えつちなカードで男を弄ぶ女性が多く参加し

ている。この大会のレベルが低いのはそのせいだろう

(やっぱり参加するんじゃないかな…)

僕は大きなため息をつく。

本当は今回の大会に出るつもりはなかったが、日頃お世話になっている人に大会を盛り上げるように頼まれたので参加している。決勝トーナメント進出は決まったが、この様子だと決勝のレベルもたかが知れているかもしれない。辞退も考えるべきか…。

「やったー、ルミカの勝ち！これでー、五連勝！」

女の子の声が聞こえた。

どうやら僕と同じく五連勝したデュエリストがいるようだ。いくら弱いデュエリストが多いとはいえ五連勝するのは簡単ではない。もしかしたら実力のあるデュエリストかも。

一体どんなデュエルをするのだろうか？是非とも手合わせ願いたいな。

僕は声のした方に向かう。

そこにいたのはツインテールの可愛らしい少女。そしてそ

のすぐそばで悶絶している男が数人いた。

「ルミカに勝ちをくれてありがとう♥決勝頑張るからね♥」

少女ルミカは負けた男達につこりと笑いかける。

恐らく悶絶している男達はルミカのえちえちカードによって敗北したのだろう。気持ちよさそうな顔で力なく寝転がっている。中にはそれなりの実力があるデュエリストの姿もあった。例えば可愛い女の子が相手でもわざと負けるような者達ではない。このルミカという少女、かなり強い。

(どうやら、辞退する必要はなさそうだな)

僕は決勝トーナメントが楽しみになってきた。

その後、決勝トーナメントを僕は順調に勝ち進んだ。予選よりはいくらかマシだが、やはり相手のデュエリストの実力はあまり高くない。難なく決勝に進出する。

そして決勝の相手は、やはりあの少女ルミカ…。

「お兄さんが決勝の相手？じゃあ、お兄さんもルミカの虜に
してあげる♥」

につこりと笑いかけるルミカ。

「お手柔らかに」

僕も笑顔を返した。

決勝のデュエルが始まる。

このルールの大会に出る以上、えちえちルールに関してはもちろん対策はしている。誘惑戦術は一通り頭に入れており、誘惑対策カードも投入済みだ。ここまでも誘惑カードを使う相手はいたが、全て倒してきた。

【第一ターン ルミカ】

「じゃあ、ルミカの先攻。この子を出すよ」

彼女が出したカードは『妖精ビクシー』^{ようせい}。蝶のような羽が生えた可愛らしい女の子のカードだ。えちえちカードではなく普通のカードである。最初からえちえちなカードで誘惑してくると思っていたので僕は拍子抜けしてしまった。^{ひょうしめ}

「ふふふ、いきなりえちなカードを出してもらえると結構よかった？お楽しみは後にとっておかないとね♥ターンエン

ド」

彼女はそのままターンを終える。

【第一ターン 主人公】

「僕のターン、ドロー」

さて、相手の『妖精ビクシー』の攻撃力はゼロだがコスト1なのに体力は∞もあるカード。そして防衛能力があるため倒さなければプレイヤーに直接攻撃することができない。突破に手間取っていると相手にコンボを作る猶予^{ゆうよ}を与えてしまう。早めに突破したいところだ。

「僕は『シャドーベビードラゴン』を召喚」

僕が出したのは小さなドラゴンのモンスター。このカードは攻撃力ゼロだが強力な効果を持つ。

「このカードは手札の召喚時に破壊される」

「あらら、出てきた瞬間^{しゅんかん}に破壊^{はかい}されちゃうんだ。かわいそう……」

わざとらしく『シャドーベビードラゴン』を憐れむルミカ。

「そして次のターン、コストを『消費』することで速攻を持つ攻撃力^ω、体力^ωのモンスターとして復活させることができる。ターンエンド」

これで次のターン攻撃力^ωのモンスターを無傷で降臨させることができる。場はがら空きになってしまいが、まだ序盤であるため大量にモンスターを展開することはできない。

そして相手の場にいるのは攻撃力ゼロの『妖精ピクシー』のみ。例えば速攻や攻撃力アップ能力のあるモンスターを出したところで致命的なダメージを受けることはない。

【第2ターン ルミカ】

「ルミカのターン、ドロー。このカードを使うよ。スペルカード、『サキュバスの加護』。モンスター一体を淫魔化^{いんま}させて攻撃力を『体力を』上昇させる」

『妖精ピクシー』の姿が変わっていく。衣装はセクシーな黒いレオタードのようなものになり、背中の蝶^{ちょう}のような羽は黒く染まる。体型はそのままなのに可愛らしい妖精^{ようえん}から妖艶な淫魔へと姿を変えた。

「さあさあ、真のえちえちデュエルの始まりだよ！」

姿が変わったのは『妖精ピクシー』だけではなかった。ルミカの姿も変わっていく。背中からコウモリのような翼、頭からは山羊^{やぎ}のような角が生える。衣装も変わり、ピクシーのような下着のような目のやり場に困る露出度^{ろしゅつど}の高い衣装に変わった。

「お兄さん、えちえちデュエル初めてでしょう？淫魔のルミカが優しく教えてあげる♥」

（い、淫魔だったのか）

淫魔はえっちな力を操る魔族達の総称だ。かつては人間と争っていたが、今は和解して共存の道^{みち}を模索^{もさく}している。人間と比較すると淫魔は圧倒的に数が少ない。僕も実際に見るのは初めてだ。

不意に辺りにあまい匂いが漂い始める。

(な、何だこれ…)

匂いを嗅いでいると頭がぼーっとしてしまう。何も考えられなくなっていく。

(だ、だめだ。デュエルに集中しないと…)

相手は『サキュバスの加護』の効果でさらに守りを固めてきた。攻撃力アップ効果も地味に厄介だ。『シャドーベビードラゴン』は体力が1しかない。次のターン攻撃しても相手の体力を削ることしかできない。

『ピクシーちゃんは自身の効果により、プレイヤーに直接攻撃することができないから、これでルミカはターンエンド』

【第2ターン 主人公】

「僕のターン、ドロー」

やはりルミカはかなりの強敵だ。僕は完全に後手に回っている。

「僕はコスト」を払い、『シャドーベビードラゴン』を復活させる。さらにスベルカード、『シャドードロー』を発動。闇モンスターを破壊して、デッキよりカードを二枚ドローする」
しかしまだ猶予はある。相手の場にはプレイヤーに攻撃可能なモンスターはいない。今は手札を確保しつつチャンス等待つ。

「せっかく復活したのにまた破壊されちゃった。モンスターちゃんは大事にしないとだめだよ」

くすくすと笑うルミカ。今は完全に相手のペース。なんとか次のターン、この状況を打破しなければ。

【第3ターン ルミカ】

「ルミカのターン、スベルカード、『サキュバスの杖』を発動。装備モンスターの攻撃力をωアップさせる」

「攻撃力を上げたところで…ピクシーは…」

『『サキュバスの杖』の効果、対象モンスターの効果を無効に

する。これで、ピクシーちゃんは防衛能力を失うけど、自身の攻撃を封じる効果も無効化。攻撃できちゃうよ」

攻撃力^ハのモンスター。そして僕の場合はカードが一枚もない。

「行くよ、ピクシーちゃんてダイレクトアタック！妖精のキス」

ちゅ♡

ピクシーが僕の唇^{くちびる}に口付けする。

(こ、これは…)

ぷるぷるとしたリアルな唇の感触。本当にキスされているかのように気持ちいい。僕はキスの味に酔いしれ、しばらく呆然^{ぼうぜん}としてしまう。

「これでターンエンドお！さあ、お兄さんのターンだよ♡」

元氣よくターン終了を宣言するルミカ。

「はっ」

僕はその声で我に返る。相手は強敵、誘惑に負けていたら勝ち目はない。

相手の場のピクシーは攻撃力^ハ、体力^ハのカードと化した。このまま放置すれば次のターンさらに強化されてしまう。そうなってしまうえば敗北に直行だ。

【第3ターン 主人公】

「僕のターン、ドロ。僕はスペルカード、『シャドーガーディアン』を発動。攻撃力^ハ、体力^ハで防衛能力を持つシャドートークン^ハを呼び出す」

かなり不利な状況ではあるが幸いにも相手のモンスターは一体。複数の防衛能力を持つモンスターを呼び出せば次のターンは凌^{しの}げる。そして次の僕のターンに使えるコストは^ハ増える。反撃のチャンスはあるはずだ。

【第4ターン ルミカ】

「ルミカのターン、ドロー」

彼女は引いたカードを見てにやつと笑う。どうやらキーカードを引いたようだ。

「スベルカード、『バトインタッチ』を発動。このカードは場のモンスターを手札に戻してコスト^②以下のモンスターを召喚できる。ピクシーちゃんを手札に戻して、手札からコスト^②の『魔法少女ルビーちゃん』を召喚」

ルミカの場合からピクシーが消えて代わりにアイドルのような服を着た可愛らしい少女が現れる。しかし、バトインタッチの効果はそれだけではない。

「妖精から力をもたらったルビーちゃんはパワーアップ！『バトインタッチ』の効果、交代前のモンスターの能力がアップしていたならその数値を引き継ぐよ」

「くっ…」

『妖精ピクシー』は攻撃が^①、体力が^②上昇していた。よってその効果を『魔法少女ルビーちゃん』も引き継ぐ。しかも

引き継ぐのは能力アップのみ。『サキュバスの杖』のデメリツトである効果の無効化は引き継がない。

「ルビーちゃんは攻撃力が^①、体力が^①のモンスターだから、攻撃力が^②、体力が^②になるよ」

より攻撃能力が高いモンスターとなった。しかし、体力は減っているし、敵の数は変わっていない。

「さらにルビーちゃんの能力発動。他のカードの効果で場に出た時、デッキから『変身』効果を持つスベルカードを手札に加えてコストを^①下げる。ルミカが手札に加えるのは変身スベル『サキュバズドレスアップ』」

『サキュバズドレスアップ』は確かモンスターを淫魔に変身させる誘惑カード。

「そして手札に加えた『サキュバズドレスアップ』を発動」
可愛らしい衣装だったルビーちゃんの姿が変わっていく。

露出度の高いセクシーなドレスに変わった。背中からはコウモリの翼のようなアクセサリーが取り付けられている。

「さあ、ルビーちゃんでお兄さんをメロメロにしちゃうよ♥

サキュバス化したルビーちゃんの効果発動。変身した時に相手モンスター全ての体力を1ずつ奪い、このカードの体力に加える」

「何!?!」

シャドートークンの体力は1しかない。つまり奪われてしまったら即破壊だ。

「エナジードレインだよ♥いただきまーす♥」

ルビーちゃんが投げキッスするとシャドートークンは全て破壊される。さらにルビーちゃんの体力が∞増加してのになつてしまう。

「さあさあさあ、いくよ!ダイレクトアタック!」

興奮した様子でモンスターに指示するルミカ。ルビーちゃんは僕に近づくを僕を優しく抱きしめた。柔らかくて大きな二つのおっぱいで僕の顔を挟む。そしてじっくりとばふばふした。

(ふわああああ、なんだこれ…。すごく柔らかい…)

僕はおっぱいの感触に魅了される。ただの映像のはずなの

にすごく弾力があって気持ちいい。デュエルのことを忘れて僕はおっぱいに夢中になってしまう。

「ルミカはこれでターンエンドだよ♥」

ターンエンドの宣言と同時にルビーちゃんが僕から離れる。しかし、僕はおっぱいの柔らかさの余韻に浸り、放心したままだ。

【第4ターン 主人公】

「おい、お兄さんのターンだよ?あれれ?魅了されちゃった?おかしいな。この攻撃には魅了効果なんてないんだけどね。ははは♪」

一分ほど放心したところでようやく立ち直る。

「ば、僕のターン…」

まだ感触が顔に残っている。デュエルに集中したいのにえっちな妄想が頭に残ってしまう。

僕のライフは残り0。次のターン、相手がルビーちゃんをパ

ワーアップさせたら敗北が決定する。デュエルに集中しなければならぬのに…。

「ほらほら、いつまで待たせるの？早くしてよ」

僕を煽るルミカ。

「くっ。僕は『シャドーフェンサー』を召喚。いや、まっ」

妄想で集中できていない上に煽られたせいで焦ってしまい、出すカードを間違えてしまった。

『シャドーフェンサー』はコスト4、攻撃力4、体力4のカード。攻撃力の高いモンスターだが何の効果も持たない。しかもコスト4のためこのターン、他のカードを出すことができない。

「あれれ？それでいいの？もしかして間違えちゃった？じゃあ、特別に『待った』を認めてあげるけど？」

「だ、黙れ！」

彼女の提案を僕は断る。待ったなど僕のブライドが許さなかった。

「僕はこれでターンエンド！」

【第5ターン ルミカ】

「あれれ？本当によかったの？このままだと、無防備なまままた大ダメージ受けちゃうよ？ははは♪」

ルミカはカードを引く。

「スベルカード、『悪夢の選択』。デッキからカード名の異なるコスト4のカードを二枚選択して相手に見せる。そしてそのどちらかをこのカードの効果として発動することができる。で、どっちの効果適用するかを選ぶのはお兄さん

♥

彼女が選んだカードは『天使の恵み』と『魅惑の抱擁』。天使の恵みはカードを二枚引くカード。相手の手札増強を許すが、『悪夢の選択』はコスト4のため、相手はこのターン他のカードを出すことはできない。

僕のライフは残り0。ルビーちゃんの攻撃力4。こちらの効果を適用すればこのターン倒されることはない。

一方の『魅惑の抱擁』は場に誘惑モンスターが淫魔化した

モンスターがいる時、相手プレイヤーに「ダメージを与えるカード。こちらのカードを選んでしまえばルビーちゃんの攻撃と合わせて僕のライフは尽きてしまう。」

選択の余地などない。『天使の恵み』を選ばなければ僕に次のターンはないのだから。なのに僕は迷っていた。

『魅惑の抱擁』のイラストにはサキュバスが男を優しく抱きしめるイラストが描かれている。

（も、もしかして。このカードを使うとさっきみたいにおっぱいに抱きしめてもらえるのか…うう、僕は何を…）

「さあ、どっち？どっち？」

わくわくした様子で僕の選択を待つルミカ。

「ぼ、僕が選ぶのは…」

僕が選んだのは『魅惑の抱擁』だ。負けるとわかっているのに『魅惑の抱擁』を選んでしまった。

「あれえ？そっち選んじゃうの？何でえ？そっち選んだら「ダメージを受けて負けちゃうよ？もしかして、お兄さん、こんな簡単な計算もできないの？あはは」」

快楽に負けて『魅惑の抱擁』を選んでしまった僕をルミカは嘲笑う。
あざわ

「じゃあ、『魅惑の抱擁』の効果、誘惑モンスター、または淫魔化したカードが場にある時、相手に「ダメージを与える」

ルビーちゃんが再び僕の元に来て僕を抱きしめる。おっぱいで顔をじつくりともみ回した。僕はおっぱいの柔らかさに身を委ねる。

「そのままルビーちゃんダイレクトアタック」

顔がおっぱいによってむぎゅつと押し潰される。

その攻撃で僕のライフはゼロになった。僕の負けだ。

「あはは！お兄さん、よっわーい♥」

情けなくおっぱいにあまえる僕を見てルミカはくすぐすこと笑う。

「でも、お兄さん可愛いから、ルミカがもっと遊んであげる♥」

ルミカは未だにルビーちゃんのおっぱいに顔を埋めている僕のそばに近寄ってくる。

「この大会、主催者はルミカなんだ。だから入賞商品も自由に決められちゃう。ということで、準優勝したお兄さんには特賞として、ルミカの特別デュエルに招待してあげる♥」

彼女は僕の耳元に顔を寄せる。

「もっとえつちなデュエル、したいでしょ？」

あまい囁き声。

完全にえちえちデュエルの虜とりこになっていた僕は彼女の問いに何度も頷く。

そして僕は負けるためにえちえちデュエルを行うドMデュエリストになってしまうのであった。